

1 基本的な考え方

いじめは、人間として絶対に許されない人権侵害であり、子どもの心を深く傷付け、人格形成に悪影響を与える大変憂慮すべき問題である。いじめは、どの学校にも、どの学級にも、どの子どもにも起こり得るものであるという基本的認識に立ち、いじめの早期発見と未然防止に取り組むことは、教師にとって重要な課題である。

いじめは、いじめを行う子どもといじめを受ける子どもとの対立構造のように見えることがあるが、被害者対加害者という単純な二極対立構造として捉えるのではなく、子供集団全体、さらにその背後にある親子関係や地域社会も視野に入れ、全体として「いじめを受ける児童」「いじている児童」「学習集団」「親子関係や地域社会」の四層構造として考えていく必要がある。

以上の点に留意して、学校全体でいじめの未然防止及び早期発見に取り組むとともに、児童がいじめを受けていると思われるときは、適切かつ迅速にこれに対処し、再発を防止する。

2 未然防止のための取組

学校全体でいじめの防止に取り組むためには、児童の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人交流の能力の素地を養う取組が必要である。

そのためには、平素から道徳授業の充実、各教科での楽しくて分かる授業の実践、保谷小学習スタンダード(学習規律)の定着、好ましい人間関係を作っていく人権意識の育成を日々の授業の中で実践し、児童が発する小さなサインを見逃すことのないよう日頃から丁寧に児童理解に努めていく。

また、アンケートや面談を通して、児童の声が教師に届くようにし、児童が教師にあったか先生に相談したいという信頼関係を日常的に築いていくように心がける。

年に3回あるふれあい月間を定期的な指導の機会と位置づけ、いじめ問題の重要性を全職員が認識し、いじめの態様や特質、原因や背景、具体的な指導上の留意点について教職員間の共通理解を図り、いじめ対策委員長を中心とした協力体制を確立して実践に当たる。その中で校内にいじめ対策委員会を設置して、いじめを発見したときの具体的な方針、役割、取組等を明示して中心的な活動をし、校内研修会や職員会議の機会を通して、教師の言動と態度について指導の改善、充実に努める。

また、5・6年生を中心として「SOSの出し方に関する教育」を実施し、児童が大人に相談できる体制作りを行う。

3 早期発見のための取組

いじめ発見のルートは、教職員による発見、本人の訴え、友達や保護者、地域、関係機関からの情報提供があげられる。

学級での一日は、児童の表情や態度、身体や服装等を観察する出席確認から始まる。授業中は、児童の筆箱やノート等の持ち物の点検、机、椅子への落書き、作品や掲示物へのいたづらがなくチェックリストを作成、平素と違う小さなサインを見逃さないようにする。また、児童の休み時間の様子を見取り、遊びや友人関係を観察する体制を学年や全校で組織し、情報を共有して教職員による発見に努める。

本人からの訴えを聞くために、ふれあい月間に質問紙によるアンケート調査を実施し、自ら訴えてきたことを温かく受け止めながらいじめの事実関係を把握する。また、いじめを見た、聞いた児童からの訴えもアンケートの中で情報収集する。スクールカウンセラーは、児童や保護者からの自由な相談時間を設定し、面談のなかで不満や不安などの思いを十分に聞き、関係職員と情報の共有に努める。

個人面談や授業公開、学校安全連絡会では、学校の取組を丁寧に説明し、保護者、地域との連携を図り、信頼関係を築いていく。

4 早期対応のための取組

(1) 初期対応の取組

いじめを把握したら即時に管理職に報告するとともに、いじめ対策委員会を中心に迅速かつ正確に事実を把握する。同時に、対応策や指導に関わる担任や学年の役割分担を明確にする。児童に対して、担任や養護教諭、スクールカウンセラーによる面接、相談の機会を設定する。保護者に対しては、学校の指導方針を丁寧に説明し、家庭の理解と協力を得るように努める。

また、いじめが犯罪行為として取り扱うべきものであると認めるときは、所轄警察署と連携してこれに対処する。

(2) 被害児童・生徒への支援

児童が自ら訴えてきたことを温かく受け止め、いじめから全力で守ることを約束する。いじめられた内容やつらい思いなどを親身になって聞くことにより安心感をもたせ、事実関係について詳しく把握する。

被害児童に対しては、担任だけでなく職員がチームを作って授業中、休み時間、登下校の様子を見取り、問題解決まで支援にあたり、児童が安心して教育を受けられるようにするための必要な措置を講じる。問題解決後も指導を継続的に行う。

(3) 加害児童・生徒への指導

いじめは絶対許さないという毅然とした態度で臨み、まずいじめをやめさせる。いじめられている児童の気持ちに着目させ、どれだけ相手を傷付け苦しめているかに気付かせ、被害者への謝罪の気持ちを醸成させる。また、いじめてしまう気持ちを聞き、心の安定を図り、教師との信頼関係をつくる。

再発を防止するため、保護者に対する支援・助言を担当や養護教諭、スクールカウンセラーが協力して行う。

5 組織的な対応の在り方

(1) 組織的な指導体制

定期的にいじめなどの問題行動に関わる情報交換の会を実施して、いじめの初期にその兆候を見落とすことのないように努める。

いじめが発見されたら、いじめ対策委員会が問題解決の中心となって指導方針を検討し、全職員で共通理解、役割分担をして、適切かつ迅速な対応を進める。

また、いじめの発見、いじめの再発を防止するための取組について適正に評価が行われるようにする。

(2) 相談体制

いじめ対策委員会で方針を決定し、担任、養護教諭、生活指導主任、特別支援コーディネーター、スクールカウンセラーなどが協力して相談にあたる。

6 研修体制

児童の自己実現が図れるよう日々の授業の充実を目指して校内研究を推進する。

また、いじめの未然防止、いじめの対応に関する研修を年3回実施する。さらに、スクールカウンセラーを講師に児童理解と教育相談に関する研修を行う。